

遇處までむかへにいで、親夫をば輶に積たる薪に跨せて、妻や娘がこれをひきつゝ、これらも又輶歌をうたうてかへるなど、質朴の古風、今目前に存せり。是繁花をまらざる、幽僻の地なるゆゑなり。

春もや、景色と、のふといひし梅も柳も、雪にうづもれて、花も緑もあるかなきかにくれゆく、されど二月の空はさすがにあをみわたりにて、朗々なる窓のもとに、書讀をりしも、遙に輶歌の聞るは、いかにも春めきてうれし。是は我のみにあらず、雪國の人の人情ぞかし。

〔閑田次筆〕江戸の人去あへぬことによりて、出羽へ雪深きころに、赴たりし道の記、即雪の古道と號し。○中天明八年の霜月、雪を凌ぎてからうじて、かしこにいたり、同九年の二月までのこと

どもをかけり。○中滑津のうまやにいたる、こゝよりならきまでは雪ことに深うして、馬もかよ

はず、乗物もかなひ侍らずといへば、そりをもとめ出でたる、はたごをばときわけて、かち人に負せつ、風にむかひては、雪吹に堪たまはんやうなしとて、そりにうしろざまにのりつゝ、はたごの馬に負せつる雨具、頭に引かづき引れゆく。○中すこし高き所に引のぼるほどは、斜にくつがへ

るべうおぼゆるを、綱引直しつゝ、こゆ、そりには蒲團を敷て、我身をも綱にて結ひつけたれば、は

しるやうにあれど、さすがにたふれず。○中峠田の驛にいたる。○中下部くるしうおはさんとして、こゝにてかごそりといふものをもとめでのせつ、これは櫓ながら、乗物のうちにありてひかる

修羅

〔饅頭屋本節用集之財之實ヲ〕修羅引木

〔易林本節用集之器之財ヲ〕修羅引木也

〔瑤囊抄〕石引物ヲ、シユラト云ハ、何事ゾ、帝尺大石ヲ動カス事、修羅ニアラズハアルベカラズ、仍テ名ヅクト云々、加様ノ戲事ハ、聲ナドノ違ハ苦敷カラヌニヤ、建仁寺大道ニ、表卷ト云酒アリ、門